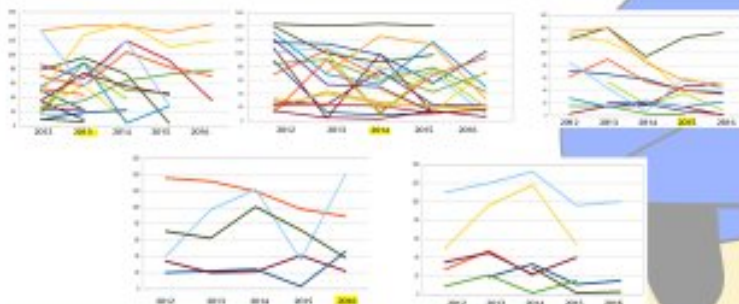


2012年から2016年の間に、移籍した日本人プロ野球選手の年毎の出場試合数を移籍した年別にグラフにおこし傾向を見た。また、二回以上移籍した選手に関しては、また別にグラフを作成した。表示されている年齢に黄色くマークしてある。それは、そのグループの選手らが移籍した年で最年長のものが二回以上移籍した選手らのグラフである。

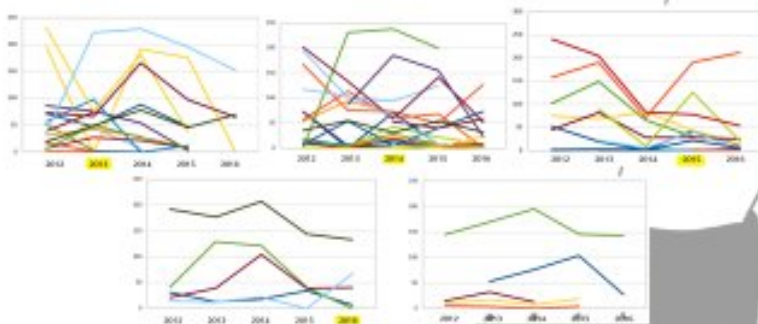
## 出場試合数



年度が進むにつれて、出場試合数が増えている選手より減っている選手のほうが少ないことがわかる。特に、2014年に移籍したグループと2015年に移籍したグループのグラフは、傾きが大きい選手が多い。人数は少ないがもちろん出場回数が増えている選手もいる。出場回数が増加している選手の多くが、移籍したその年に前年度の数字を上回っている。2013年に移籍したグループに多く見られるのが2013に移籍したものの出場試合数は減少しており、翌年度以降は一軍の試合出場がない選手がグループの19人中4人を占めている。また、同じグループの2015年以降に出場試合数が0の選手は3人増え19人中7人となっている。

## 出場試合数 出塁数

から見る移籍選手の成績の推移  
(2012~2016年)



## 出塁数

2012年から2016年の間に、移籍した日本人プロ野球選手の年毎の出塁数を移籍した年別にグラフを作成し、傾向を見た。また、二回以上移籍した選手に関しては、また別にグラフを作成した。表示されている年齢に黄色くマークしてある。それは、そのグループの選手らが移籍した年で最年長のものが二回以上移籍した選手らのグラフである。

V字をえがいているグラフが見られる。2015年移籍のグループでは移籍の前年の2014年をはさんでV字型のグラフになっている選手は14人中半数の7人になっている。全体を見ていくと、移籍した年を頂点とした山型のグラフが多くみられる。移籍する前年度より、移籍した年の出塁数が上がった選手は5個のグループ内の全選手68人中半分以上の35人を占めている。しかし、そのうちの23人が翌年以降出塁数を減らしている。全体から見ても3分の1に近い数の選手が移籍直後は前年度の成績を上回ることができたものの、継続できず移籍年の翌年には成績をおとししてしまっている

## 考察

移籍した選手たちは移籍した年は前年度と比べると出場試合数は落ちていても出塁数があがっていることが多いので移籍した年の成績は前年度よりも良いと考えられる。しかし、出場試合数のグラフがどのグループのものでも減少傾向にあり、出塁数のグラフでも移籍前年度<移籍直後の年度>移籍直後の年度の翌年となっている選手が多いことから継続して良い成績を残している選手は少ないと考えられ。

また、このグラフを作成する際に移籍した選手らの年齢を調べたところ28歳~30代前半が多く、プロ野球の引退選手の平均年齢が29.7歳(日本野球機構サイトより)ということから出場試合数にはチーム内の自分より若い世代の台頭や、出塁数には身体的な衰えも原因としてあげられるのではないだろうか。

結果として、移籍して活躍することができる選手の数はあまり多くはない。そもそも、FA権を使うなどして移籍した場合は、選手の年齢が高い場合が多い。よって、移籍した当初は好成績を残すことはできても、チーム内で若い良い選手が出たり、身体の衰えからのケガのリスクもあったりする。そのため、好成績を維持することが難しいのだと思う。